

(一) 貞香会という名も久しいものになりましたが、いつごろ始まったのですか、とたまに訊かれることがあります。

身近な人々には親しみのある名になっているかも知れないが、書道界の一隅に生まれてから今年で六十年になる。

明治四十四年創立の西川春洞先生（一八四七—一九二五）方ご門下の先生と、その又弟子になる人々、すなわち今日いわれる西川派の明治書道会では、大正十一年（一九二二年）、その最後の書道展が芝公園の増上寺客殿を借りて催された。書道だけで独立の一門の展覽会というのは他はまだなかった時代だと思ふ。

春洞先生は既にご長逝になって、世にいう七福神（諸井華畦の女性一人、武田霞洞、豊道春海、安本春湖、中村春坡、花房雲山、諸井春畦の男性六人）の諸先生はご健在、その他の春洞先生直門の各先生と、その弟子の多くの先輩たちが集まって、会期中席上揮毫などもやっていた。西川寧先生（一九〇二—一九八九）は慶応大学の制服を着てやはり何か書いておられるのであった。

参観者が紙や絹、色紙、扇面などを買って、何か書いていただいでうれしそうに周辺を取りまいていた光景はまだ眼裏に鮮やかである。この時の席上揮毫を見ていた同門の年齢もほぼ同じくらいの熊倉晃洞という青年と私が、霞洞先生に侍座して多少のご用を便しながら一日中ながめていたのが縁で、同門中特に交わりを深くしたのであった。ちようど住所も近いので、日曜の半日は往復して互いに訪問、書の研究談で暮らすといった仲から、友人や後輩などに請われるがままに交替で半紙の手本を書いて週一枚配る書道会が始まり、「大鷲書道会」と称していた。いかにも書生さんらしい会名で熱心にやっていたが、この熊倉晃洞君は一年ほどして肺患のためにたおれて、私ひとりの負担になってしまった。

大正十二年（一九二三）の春になって、大鷲書道会は私の書道会としては名が派手すぎるので「貞香書道会」と改称し、私だけの責任でやる新しい会規も決め、月謝金五十銭ということで出発したの

「求無上慧」昭和四十三年



である。だが会員はごく少なくて、全員で三十人を越えることはなかったように記憶している。しかし半紙の手本は依然続けたが、大体は折帖を使うことにした。

この年、少し前に、仮名の指導をいただいた小野鷲堂先生がご長逝になった。わずかの期間ではあったが、これっきり仮名の先生につかないで独学することになった。

またこの年の九月一日に、史上有名な関東の大震災に見舞われている。幸いに以前から道路の改良のために移転させられることになつており、東京より静かな土地、ことに父は郷里の静岡に似た風致があるといつて、浦和に住まうことを希望し、震災の二日前に当時県庁所在地でもまだ町であった浦和町に移った。

移転忽々で、荷造りをしたままの二日後、あの大震災にも東京での罹災を免かれて家族はみな安全だったが、私は勤務中で役所の重要書類や図書館を庇ったりして逃げて逃げそびれ、飲まず食わず火焔の裡で四日過し、やっと命は助かり、丸の内から歩いて浦和へ帰った。この時の無理が原因で病氣となり、暮から翌春まで入院をしたが、これを境にして病後すっかり健康となり七十歳をこえるまで病氣らしい病気をしなくなった。

これは非常に貞香会の発展に影響し、精励して勉強もし、役所と兼務で東京市立商業学校に書道講師として十二年勤め、この卒業生の優秀な者が会へ入り、一方役所の方も若い同僚が会員となつてくれ、会は大分盛んになった。

今日なお盛岡市で九十歳に近い高齢にもかかわらずお弟子さんに教授し、地方の書家として聞えている一条素香氏などは、このころに貞香会々員となつた人。だからもう六十年弱の大古参である。これと相前後して生方素竹、古澤素雨氏などもおられるが、ここでは繁をさけておく。（つづく）

『書範』昭和五十七年